Rio

豊田市矢作川研究所　月報

◆身近な水辺の生き物たちの現状と観察のすすめ
◆「からだ」で自然を知ること
◆第５回「矢作川天然鮎感謝祭」が開催されました！
◆タコノアシさん、こんにちは！

10
2013
No.179

豊田市矢作川研究所　〒471-0025 愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F
TEL 0565-34-6860　FAX 0565-34-6028　e-mail yahagi@yahagigawa.jp　URL http://yahagigawa.jp

身近な水辺の生き物たちの現状と観察のすすめ

鳥居　亮一

2003 年に学生時代を過ごした札幌から、生まれ育った碧南市に戻り、それから 10 年間、西三河南部の矢作川水系下流域と明治用水を中心とした水路網、油ヶ淵とその周辺を主なフィールドとし、水辺の生き物の観察を行っています。

この地域も他の地域同様、カダヤシ、ブルーギル、オオクチバス、カワヒバリガイ、ウシガエルといった特定外来生物、タイリクバラタナゴ、カラドジョウ、カムルチー、スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）、タイワンシジミ、アメリカザリガニ、ミシシッピアカミミガメといった要注意外来生物、ゲンゴロウブナ（ヘラブナ）、ギギ、オヤニラミといった国内外来生物など多くの外来生物が生息し、在来生物を脅かしています。また、近年になって大陸産の外来生物と結論付けられた、悪食で知られるコイ（飼育型）による在来生物への影響も大きいと考えられます。

写真１　タイリクバラタナゴ（2013.8.10　西尾市）

現在、環境省版レッドリストにはかつてどこででも見られ、身近な存在だったニホンウナギやドジョウ、メダカ南日本集団（現、ミナミメダカ）、また、魚類以外ではモノアラガイやヤマトシジミ、ニホンイシガメなどが掲載されています。愛知県版レッドリストでもメダカ（現、ミナミメダカ）やドブガイ（現、ヌマガイとタガイ）を含むイシガイ科淡水二枚貝類、マルタニシ、マシジミなど身近な存在だった多くの種が掲載され、生息環境の破壊や外来生物の脅威に晒されながら、辛うじて生息しているのが現状です。また、この地域は河川下流域で、緩やかな流れの水域が多く、トウカイヨシノボリをはじめとする止水環境や緩流域を好む多くの魚類が生息していますが、同様の環境を好む肉食性外来魚の脅威に常に晒されていると考えられます。

写真２　トウカイヨシノボリ（2013.8.10　西尾市）

しかし、そこは水の中。私たちが暮らしている陸上からは覗き見る事が難しい世界です。それなら、外来生物も在来生物もあわせて、水辺の生き物たちに会いに行ってみませんか？

会いに行くと言っても、特別な装備は必要ありません。水路や浅い水辺であれば、長靴とタモ網があれば十分です。もしあれば、小さな水槽やプラスティックケースなどを持って行くと、横からの観察も出来て便利です。深い場所や広い場所なら釣りでも良いでしょう。針の大きさや餌を変えれば釣れる生き物も変わって来ます。きれいな川なら、泳ぎながら観察するという方法もあります。夏の暑い日に水中メガネやシュノーケルを着けて、水着やＴシャツのまま泳ぐのはとっても気持ちが良く、楽しい観察方法です。

写真３　ミナミメダカ（2013.9.14　西尾市）

もちろん、水辺は危険がいっぱいです。流れの速い場所や深い場所には近付かない。雨が降っている時や降った後、上流で雨が降っていそうな時、ダム放水時には近付かないなど、注意が必要です。また、岩やゴミなどで足を怪我する事も多いので、裸足やサンダルではなく、履き潰した靴などを使うと良いでしょう。

写真４　ニホンウナギ（2013.7.20　西尾市）

また、規則で、捕ってはいけない生き物や区間、持ち帰ってはいけない生き物があり、種類によっては時期・大きさで捕獲制限のある生き物があるので、事前に調べておく必要はありますが、生き物の観察そのものに規制はなく、誰でも自由に楽しむ事が出来ます。

写真５　ヌマガイ（2012.11.16　安城市）

実際に水辺に足を運び、直に生き物たちを見て触れる事で、たくさんの情報を得る事が出来ます。色、形、大きさ、特徴、環境など。その他、どんな生き物たちがいたかを記録しておくと良いでしょう。その際、写真も撮っておく事をおすすめします。

最近のデジタルカメラは防水機能が充実した機種もたくさん出ているので、誰でも手軽に水中撮影が出来るようにもなって来ています。

水中写真は、標本写真と違い、全身をきれいに写したり、特徴をはっきり写し込む事は困難ですが、生きている時の色合いや雰囲気、周辺の環境を写し込む事で、その生き物たちの活き活きとした姿を記録する事が出来ます。

写真６　ニホンイシガメ（2012.5.31　西尾市）

まずは、観察を通して、そんな生き物たちを好きになって下さい。水辺に足を運び、愛すべき身近な水辺の仲間たちとの出会い・触れ合いを楽しみましょう。

そして、記録を残し、水辺の環境と生き物たちの今とこれからを考えてみませんか？

（とりい　りょういち、三河淡水生物ネットワーク）

「からだ」で自然を知ること

長澤　壮平

情報化が進む現代、ＩＴ技術は社会に圧倒的な便利さをもたらしています。この研究所でもＰＣやインターネットはなくてはならない道具です。反面、ネット依存や犯罪、子どもへの悪影響など、数多くの問題も指摘されています。

そればかりではありません。著名な心理学者であるエドワード・リードは、その著書『経験のための戦い』のなかで、「わたしたちは、まるで日常生活から一次的経験を根絶することに取りかかっているといっても過言ではない」と述べています。人間は、インターネット、テレビ、印刷物などのメディアを高度に発達させることで、生身のからだでじかに現実世界を経験する「一次的経験」の機会を激減させているというのです。しかし、人間に都合よくつくられたメディアの情報の経験（「二次的経験」）によって世界を十分に知ることはできません。大切な経験の機会の多くをメディアに委ねてしまうことで、命の大切さや、自然の恵みなど、人として生きていくうえでの基本的な知が失われてしまう恐れがあります。

私が研究のために矢作川流域のみなさんに聞き取りをしているなかで、こんな言葉が聞かれました。

「僕らが子どもの頃は、上級生が下級生を引き連れて、山でも川でも全部遊びを教えたんだ。ガキ大将に連れられて。実は守ってくれてたんだね。川なんかは明らか。必ず下級生をはさんで泳いでいく。危ないもん、だって死んじゃうもん、おぼれたら。お母さん方は岸で見とるだけで監視人なんだ。救助人じゃないんだ。なにかあったって見とるだけ。助けたり、現場で秩序守って安全を守っとるのは上級生。社会的役割を明確に意識してたよな。」

この発言は、おおむね昭和 30 年前後の様子を語ったものです。このころは泳ぎの「指導」や「危険」へ対処する役割を「上級生」が担っていたことがわかります。ここでは、子どもが全身を矢作川に飛び込ませ、川の「巨大さ」や「危険」などから自然を全身で知り、そこでの「互助」のなかで自らの主体性を堂々と発揮させています。

さらには人間としてのあり方までをも矢作川が教えてくれることを、中流域にお住まいで、昭和 20 年ころ生まれの方が語ってくれました。

「矢作川は母なる川っていうけど、本当に、人間が、人として育つ上でのやさしさというようなものを、それからこころの豊かさだとか、そういったものをだまって教えてくれるというのか…あれに深くこう、からだじゅうで関わってると、知らず知らずのうちに自然っていうものが、人間も一員としての自然っていうものが、どういうものなのかっていうのを教えてくれる。」

このお話では、自然と人間が重なり合っています。「やさしさ」や「こころの豊かさ」において、人間と自然は同じものであり、人間は「からだじゅう」で自然と関わりあうことでそれを学び、まさに自然そのものになるのかもしれません。

リードによれば、人間は現実世界の「危険」や「不安」から、都合のよい「二次的経験」に逃げ込む傾向にあります。結果、メディアやＩＴの「二次的経験」は際限なく拡大し、人間の経験を奪い、知をむしばんでいます。残念ながら矢作川の流域でも、人々のからだが自然環境と関わる機会は著しく減ってしまいました。

それでも矢作川は、人々に豊かな「一次的経験」をもたらす場として、そしてそのなかで自然や人間について教えてくれる場として、やさしく、ときに厳しい姿を人々に向けて開いています。

この研究所でも「矢作川学校」を開校するなどして、人々がからだで自然を経験する場を提供してきましたが、スマートフォンが「一次的経験」の機会を奪っていく昨今、こうした取り組みはますます重要になってくるように思われます。

（ながさわ　そうへい、豊田市矢作川研究所 研究員）

矢作川中流　広瀬やなの様子　昭和 50 年ころ（加藤徳治氏 寄贈）

▶第５回「矢作川天然鮎感謝祭」が開催されました！

毎年恒例の矢作川天然鮎感謝祭が９月１日に豊田大橋東側の千石公園にて開催されました。今回は、開催直前に台風の接近があり無事に開催できるかドキドキしましたが、幸運にも接近していた台風は消滅、開催前夜に降った雨による増水も程よく、当日は薄雲がかかる程度と天候にも恵まれて、無事にイベントを開催することができました。

このイベントは、三河湾から矢作川に遡上する天然アユの恵みに感謝してもらうのと同時に、矢作川に愛着心を深めてもらうことを狙いとして開催しています。毎年、天然アユを育んでくれた矢作川に、アユを釣りまくった釣り師の方に、焼きまくった腕の良い焼き師の方に感謝して美味しくアユをいただきます。

アユの塩焼きを食べた後は、矢作川を眺めながらの「矢作川マニアッククイズ大会」にチャレンジ。やさしい問題からかなりマニアックな問題まで取り揃えた、子どもから大人まで楽しめる内容でした。クイズに答えようと一生懸命手を上げたり、クイズに正解して大はしゃぎする子がいたりと、会場中が子ども達の大きな歓声に包まれていました。元気な子ども達の姿はとても輝かしく元気をもらいました。

最後に、イベント開催にあたっては大勢の方々にご協力いただきありがとうございました。来年も今年以上に、参加者に多くのアユを味わってもらい、笑顔になってもらえるイベントになることを期待します。（加藤 直貴）

▶タコノアシさん、こんにちは！

昨年、矢作川の久澄橋下流左岸で河道掘削に伴い河辺のマダケ林が一掃され、河辺に広大な開放空間が出現したことを Rio163 号でお知らせしました。この区域の植生を定期的に調べていますが、今年になってタコノアシを見つけました。花の形をひっくり返った蛸の足に見立てたこの風変わりな植物はユキノシタ科の多年草で、国と愛知県の準絶滅危惧種に指定されています。湿地や河辺など水位の変動が大きい場所に生育しますが、そうした環境が減少したため全国的に数を減らしました。矢作川では掘削後、水際に魚の集まる「せせらぎ」と、そこに伏流水を供給する湧水池が作られましたが、今年の８月には湧水池の下流から加茂川合流点付近までの範囲で 50 本以上のタコノアシを確認しました。掘削によって川から陸へのエコトーン（移行帯）が創出されたことと湧水池からの伏流水が、タコノアシの生育できる環境を蘇らせたのだと推測されます。タコノアシのある環境には、他所には少ないカヤツリグサ科やイグサ科の草本やヤナギ類の実生も多く見られます。この思いがけない贈り物が生き続けることのできる環境を守っていきたいと思います。

【追記】９月の台風 18 号により、タコノアシを含む草本の殆どが流失しました。これも自然の撹乱ですので、今後の推移を見続けていきたいと思います。（洲崎）

後記

今夏、矢作川学校で二人のＨ君との出会いがありました。研究所へ職場体験に来てくれた豊田市立旭中学校のＨ君は、お兄さんからの口コミがあったとのこと。もう一人のＨ君（愛知教育大学附属岡崎中学）は、昨年参加した矢作川学校で「これからも研究所を訪ねて下さい」と声をかけてもらったので、水辺の外来生物の取材に来たとのことでした。リピーターにも恵まれ、矢作川学校の仕事に喜びもひとしおです。（内朝）

R100 再生紙を使用しています